

論 説



鹿児島県のよさを生かした 「生きる力」の育成を

文部省初等中等教育局高等学校課課長補佐

森 田 正 信

鹿児島県教育委員会に平成8年・9年度の2年間勤務させていただき、たくさんの方々に大変お世話になりました。平成10年4月に、文部省の高等学校課に戻ってからは、ちょうど10年に1回の学習指導要領の改訂を担当することとなり、教育課程審議会審議のまとめ→答申→学習指導要領改訂作業→告示→移行措置告示→教育課程説明会→衛星通信説明会→解説書作成と、時間に追われる日々を送っています。

今回の学習指導要領の改訂は、小・中・高等学校を通じ、子どもたちに「生きる力」を育成することをもっとも基本的なねらいとしています。鹿児島県教育委員会に勤務していたとき、教育委員の先生から、文部省の示す教育改革の方針は、抽象的、総花的で中身がないと御指摘を受けたことがありました。確かにそういう面があると思います。「生きる力」にしても各地域、各学校で、それぞれの特色やよさを生かして中身を肉付けしていくことが期待されていると言えます。

「生きる力」とは、中央教育審議会の答申では、次の三つの要素からなることが提言されています。すなわち、①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、②自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性、③たくましく生きるための健康や体力、の三つです。これらについて、鹿児島では、どのような肉付けができるか、鹿児島県に勤務していたころを思い出しながら考えてみました。

第一に、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」についてです。これは、知・徳・体の「知育」に対応する部分だと言えます。

鹿児島には、読書を大切にしている伝統があります。今も「朝読み夕読み」が行われている地域がありますし、椋鳩十先生以来の「親子20分間読書の運動」の果たした役割は大きいというお話をよくうかがいました。ある町を訪問した際にも、その町の子どもたちは、順番で「夕読み」をすることになっていて、野原でサッカーか何かをして遊んでいても、その日の当番の子どもは、時間がきたら必ず忘れずに、遊びを抜けて放送施設まで行き、自分たちで鍵を開け、スイッチを入れて、その日の部分を読み上げ、後片づけをした後はまた野原に戻って遊ぶんだというお話をうかがいました。どこの誰が読んでいるのか、地域の人たちには分かっている、道で出会ったときに、声をかけられたり、褒められたりするのを楽しみに、みんな大きな声でしっかり読んでいますよというお話でした。

これからの教育では、基礎・基本を確実に習得し、それを基盤として、単なる知識の習得ではなく、思考力、判断力、表現力や問題解決能力などを育てることが求められています。そのような豊かな学力を培ううえで読書の効果は大きいと思います。先日、東京で、鹿児島のある高校の校長先生にお会いした際も、1年生の課外授業の時間を減らして読書の時間にしましたが、その方がはるかにいいと、おっしゃっていました。

読書は、心も豊かにします。また、社会や他の人々とのかかわり合いを認識し、自分の生き方を考え、学習の意義を自覚し、学びに対する意欲や主体性をもつことの大切さを教えます。このことはとても重要だと思います。これがなければ学力は伸びないと思います。ところが、このような力は、単に勉強をしているだけでは身に付きません。ここに、重要ポイントがあるように感じます。

第二に、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」です。

道徳教育を充実してほしいということは、私が鹿児島県に勤務していたころ、最も多くの方々から指摘されたことでした。教育委員の先生からも、県議会の議員の方々からも指摘されました。ライオンズクラブや青年会議所、女性団体の方々、留学生のお世話をしておられる方、学校のPTAの役員の方など様々な方々とお付き合いさせていただく機会がありましたが、多くの方の教育に対する最大の関心事はこの点だったように思います。

鹿児島には、薩摩、大隅、種子屋久、奄美それぞれの地域に様々な教育伝承が残っており、それらの中に道徳教育の重要な指針を示しているものが数多くあります。異年齢集団による体験活動の伝統もあります。また、例えば、木曾川治水工事に従事した薩摩義士をはじめとして、郷土の先人の生き方が貴重な道徳教育の教材となっています。

情報化の進展により、マスメディアを通じて東京から大量に情報が流され、日本全国の流行や嗜好などの均質化が進んでいるように思います。しかも、往々にしてメディアによって流される情報は、子どもたちの教育環境を難しいものになっているようです。しかし、メディアにその自覚はなく、青少年を取り巻く問題を取り上げては、学校や家庭の責任を論じています。今や、メディアを通じて子どもたちの間に広まる情報の影響力は、教師の指導や親のしつけを無力なものにするほど大きなものになっているのではないのでしょうか。

このような状況の中では、それぞれの地域独自の情報や価値観を大切にすることがとても重要だと思います。鹿児島には、そのための貴重な財産が数多くあります。情報化の波に洗い流されてしまう前に、それらの価値を再認識し、教育に生かし、将来の世代に伝えていくことが大切だと思います。

第三は、「たくましく生きるための健康や体力」です。

鹿児島には、山坂達者の伝統があり、今でも多くの学校が、遠行や遠泳を行っています。薩摩半島縦断や桜島一周マラソンなどを行っている学校もあります。学校の教育活動ではありませんが、妙円寺詣りもそのような伝統の一つでしょう。また、私が、鹿児島に勤務していたときに、「おやっ？」と思ったことの一つが、どの学校も、秋の運動会や体育祭については、一年間の様々な学校行事の中でも最も重きを置いて取り組んでいることでした。運動会や体育祭の出来映えは、地域や保護者の方々からその学校が評価される最も重要な場面だというお話を聞いたことがありました。

私が鹿児島に勤務していた2年の間に、二つの小学校の取組が全国的に取り上げられ、大変うれし

く思ったことがありました。一つは、ある小学校の児童が、錦江湾横断遠泳のための練習に取り組む様子が、ニュース番組の特集コーナーで何週かにわたって取り上げられたことです。初めて錦江湾横断に挑む4年生の児童一人一人がそれぞれに努力している様子は、大変感動的な内容でした。もう一つは、別の小学校の6年生のあるクラスの児童全員が、テレビ番組の30人31脚競争の全国大会で優勝したことでした。担任の先生はもとより、運動の得意な子もそうでない子もクラスが一丸となって励まし合いながら、地区予選からどんどん勝ち進んでいって、ついに全国優勝を手にしたときには、思わずテレビの前で涙を流してしまうほどでした。

先ほどは、メディアを批判しましたが、青少年を巡る問題を取り上げる際には、このような子どもたちのすばらしい面を伝えることを中心とするような教育的配慮をしてくれれば、メディアは子どもたちの教育環境をこの上なくいいものにする力をもっているのではないかと思います。

現状のメディアの影響の下では、自然の豊かな地域でさえ、子どもたちの食生活や遊び方が都市部の子どもと変わなくなりつつあるようです。だからこそ、鹿児島にある鍛練の伝統は、これからもとても大切だと思います。

何だか、私の思い出話のような話になってきましたが、申し上げたいことは、[生きる力]の育成については、それぞれの地域や学校でそのよさや特色を発揮して魂を入れ、子どもたちの教育に生かしていくことが期待されているということです。

新しい学習指導要領は、このような[生きる力]を育成することを最大のねらいとしています。最初にも申しましたが、今回、私は学習指導要領の改訂を担当したわけですが、ここで、学校への要望も含めて、新しい学習指導要領の趣旨を実現していく上で大事だと考えていることを述べさせていただきます。

第一に、教育内容の厳選についてです。新しい学習指導要領は、[ゆとり]の中で[生きる力]を育成することを目指して、小・中学校では教育内容を基礎的・基本的な事項に厳選しています。これに対して、学力を低下させるものだとして、大学の数学や理科の教員の一部から批判があるようです。しかし、新しい学習指導要領は、厳選された基礎・基本は確実に身に付けさせるようにすることをねらいとしています。学習指導要領にたくさんの内容を盛り込んでも、それが子どもたちに身に付かなければ意味はありません。これまでの学習指導要領に対しては、大学教員たちは、「詰め込み教育」だとの批判をしてきました。確かに文部省の調査でも、授業の内容が理解できている子どもたちが、小学校で7割、中学校で5割、高等学校で3割という、いわゆる「七五三」現象を裏付けるような結果も出ています。また、国立教育研究所の調査でも、小学校3年生でアンケートをすると、理科が好きだという子どもは体育と並んで一番多いのですが、中学校、高等学校と学年が上がるにつれて、好きな子どもは減っていき、高校2年生では理科は最も嫌いな教科の一番になっています。あれもこれも詰め込んで教えようとする、自分たちでいろいろ試行錯誤して観察や実験をしたり、なぜだろうとじっくり考えたりする時間がなくなり、学習は面白くなくなります。大学の教員の方が御自身の

専門分野を大切に思う気持ちは分かりますが、だからと言ってそれを子どもたちにも押しつけられれば、子どもたちはますます理科や数学から離れていくでしょう。平成11年2月に中学2年生を対象に行われた国際教育到達度評価学会（IEA）の国際数学・理科教育調査においても、我が国の中学生の学力は全く低下しておらず国際的にトップレベルにあることが明らかになっていますが、数学が好きだという生徒は減っています。このようなことから、じっくり学習ができる時間的な余裕の中で、授業内容の理解度を高め、学びへの探究心や知的好奇心を高めようとする新しい学習指導要領こそ、数学や理科の好きな子どもを増やし、我が国の科学技術立国を支える裾野を広げるものにほかならないことが示されていると言えます。

第二に、基礎・基本と自ら学び自ら考える力の関係についてです。結論から申し上げますと、特に、小・中学校の段階では、基礎・基本の習得が確実に行われるような学習指導が大切だと思います。自ら学び自ら考える力の育成は、その基礎となる知識理解を軽視しては実現できません。今、鹿児島県では、基礎学力をしっかりと身に付けられるようにしようという取組が熱心に行われていると聞いていますが、とても大事なことだと思います。特に、小学校段階では、国語や算数などの基礎知識の習得と学習の習慣や態度の育成が何よりも大事です。

今回、導入された総合的な学習の時間は、それらを基盤にして、知の総合化が図られるものであり、それは、小学校、中学校、高等学校と学年が上がるにつれて、学習の深化が期待できるのではないかと考えます。特に、生徒の興味・関心が多様化し、自らの進路も考えるようになる段階では、この時間で、自ら課題を設定し、調査・研究し、まとめ、発表し、討論するというような問題解決的な学習活動が、なお一層、重要になってきます。まさに、このような力こそが、大学に入ったり、社会に出たりしたときに必要となるものであり、初等中等教育の出口に近づけば近づくほどそのような力が身に付いていかなければなりません。ところが、現実には逆で、高等学校の先生方の中には、総合的な学習の時間より教科・科目のほうの方が大事だという意識が強すぎるようです。中には、修学旅行や受験指導で総合的な学習の時間をやったことになってしまおうと考えている先生までいるようです。小学校のほうで体験的、問題解決的な学習に熱心で、高等学校ほど教科・科目の知識の教え込みや学習の習慣、態度の形成に熱心だというようなことになってはいないでしょうか。本来は、小さい段階から基礎・基本や学習の習慣、態度を身に付け、学年が上がれば、様々な体験や問題解決を通じて、自ら進路を考え、主体的・自律的に学習に取り組んでいくような、そのような学習の在り方が必要なのではないかと思えます。

第三に、選択幅の拡大と個性を伸ばす教育についてです。新しい学習指導要領では、すべての子どもたちが共通に学ぶ教育内容は減らしていますが、中学校、高等学校の段階での選択学習の幅を拡大し、生徒の個性を伸ばす教育を進めることとしています。最近、大学人、特に理科の研究者からは、「選択」に対しても批判的な意見が聞かれます。高校時代に、物理も化学も生物も地学も全部必修に

すべきだということです。高等学校には卒業後様々な分野に進む生徒がいるわけで、全員が理系の大学に進むわけではありません。そのような多様な進路希望をもつ高校生全員に共通の必修科目として最低2科目を課しているもので、2科目で足りなければ、大学の理系の学部なら、入試でたくさん理科の試験を行えばよいはずですが、大学入試センター試験だけで足りなければ個別試験で課すこともできます。それをせずに、高校生全員に物理も化学も生物も地学も必修にせよなどというのは、とても無理な話です。そもそも、大学人は、これまでわが国の教育を「一斉」「画一」だと批判してきたのではなかったでしょうか。

ただ同時に、高等学校の側でも、例えば、理系の大学に進もうとする生徒に対しては、理科の学習をたくさんできるようにすることが大切だと思います。それができるように、全体として必修の単位数を減らして、選択に充てることができるようにしているのです。選択幅の拡大や個性伸長の教育は、好き嫌いを許容し、生徒に楽をさせるためのものではありません。自ら進もうという分野、自分の得意分野の学習をしっかり行い、それぞれの能力を十分に伸ばすためのものです。中学校の後半以降はそういう段階だと思います。とりわけ高等学校での学習については、いろいろな教科を万遍なく学習させるというのではなく、生徒がそれぞれの伸ばそうとする分野の学習を十分行えるような、そのような教育課程を編成してほしいと思います。

今年の教育白書は、教育改革を特集しています。もう15年も教育改革を続けていて、個人的には、このあたりで一段落し、これまでの成果と現状の評価をしてもよいのではないかと思ったりもしますが、現実には、学校の外から見ると、まだ改革は不十分だと映っているようです。学校の中にいる人と外から教育を見ている人との間では、まだ意識のギャップがあるようです。今日の経済状況の下で、民間企業も大きな意識改革を迫られています。文部省も、平成13年からは文部科学省となり、組織も仕事の仕方も変わり、意識改革が求められます。学校だけがこれまで通りでいいはずはありません。鹿児島で多くの先生方とお付き合いをさせていただきましたが、素晴らしい先生方がたくさんおられます。行政にできることは制度や基準をつくることまでです。それぞれの学校で、郷土のよき伝統を大切にしつつ、変えるべきは思い切って変えていくような新しい時代の鹿児島の教育が実現されることを期待しています。

----- 森田 正信 先生 略歴 -----

昭和40年徳島県生まれ。京都大学教育学部卒業後、文部省に入省。高等教育局専門教育課企画係長、官房総務課法令審議室審議第一係長、初等中等教育局中学校課専門職員等を経て平成8年4月から平成10年3月まで鹿児島県教育委員会学校教育課長。平成10年4月から現職。



教育改革は漢方処方で

鹿児島県教育委員会教育委員長

増 永 昭一郎

はじめに

私の中学時代からの友人に大河内明爾さん（前武蔵野女子大学長）と言う人がいる。鹿児島には珍しい文学者で特に食文学では第一人者である。この友人が1994年に「こころの漢方薬」という本を出版した。文学、ふるさと、人生に関する味わいのある本であり、この本の題名を借りてこの論説のタイトルにした。彼の言うところでは故郷というものはじわじわと人生に影響を与える漢方薬のようなものであり、かつ心の教育の原点であると言うのである。県立青少年研修センター発足当時、知事さんの意向で作家の海音寺潮五郎さんと司馬遼太郎さんの二人を顧問として委嘱することになり、私はこの高名な二人の作家と懇談する機会があった。その時、海音寺潮五郎さんが「私が死んだらもう鹿児島からは作家は出ませんよ。数万枚の原稿用紙の一字一字を丹念に埋め、そのために膨大な資料の収集が必要で、こんな根気のいる仕事は鹿児島県人には向きません。」と言われた事がある。鹿児島の県民性を的確に指摘されたと思ったが、大河内さんはその貴重な後継者の一人である。鹿児島県民にはこのような欠点もあろうが、また多くの長所もあると思う。

1 教育改革の方向

学校5日制の導入をにらんで教育課程の改訂など急激な改革の波が押し寄せているかのようである。また地方分権推進法の成立により地方教育委員会と教育現場に権限の委譲が行われる。さらに、政府は教育改革推進国民会議を設置し、来年の国会は教育国会となるであろうと、ある国会議員の方から聞いている。今までの教育改革がともすれば小手先の手直しに終わった嫌いがあったが、今回は根本的に法律・制度・内容ともに多様な改革論議が期待される。それは言うまでもなく現在の教育制度・内容ともに問題が多いからである。学校で言えば人間教育を基本としながら基礎・基本的な学習に力を入れること、自然・社会体験の不足の解消、人間関係学習が問題となろう。大人で言えば生涯学習体系を確立した上で生涯学習の習慣を身に付けることであり、家庭の教育力の充実であろう。分かり切った問題のように見えて、実は国民全体の意識改革が先ず求められる問題であると思う。戦後、我々は教育基本法に基づいて努力してきた。その第一条の前半の精神は確かに個人を尊重し平和な国家の形成者として教育が為されてきたと思うが、後半の「国家・社会にとって有為な国民の育成」は軽視されてきたように思う。基本法そのものの見直し論議が起こるゆえんである。

御承知のとおり急激な社会情勢の変化に対応するには、即効性のある化学薬品も必要であろう。しかし教育は「国家百年の大計」と誰もが口にする。それは教育改革と言えども、それぞれの地域で取れる薬草を材料とする生薬が、つまり漢方処方が必要だと言うことである。つまり将来を見据

えた改革には自然に効いてくる改革も大事である。登校拒否，怠学，いじめはなかなか減少しないし，中・高校生で自宅学習の時間ゼロの生徒が30%に及ぶ。家庭における躰の不足や児童虐待などの各種問題がそのまま改革の方向を示している。就職難の時代と言われながら自分の気に入らない仕事には就かないし，すぐに辞める者も多いと言う。そしてフリーターなど自由気ままな生活，結婚して縛られるのは嫌だという者も増加し，少子化の一つの原因ともなっている。人間が社会的存在であるとの教育は抜けているのである。今までの日本の教育はあまりにも画一的であり，児童・生徒が判ろうが判るまいが一律に同じものを与え，そのためにはみ出す者，落ちこぼれる者，落ちこぼしを食う者を生んできた。思春期教育は中学校からのんびりと構える時代はとうの昔に終わり，小学校時代から必要になったが，十分でないので中学校1年になると途端に問題が噴出している。一部の手直し改革ではもはや手遅れであり，教える側の意識改革も含めてじっくりと思いついた手だてを講ずる時であろう。

2 改革への提言

我々日本人がこれからどんなビジョンを持ち，どんな社会生活をしようとするかが，教育改革の方向を示す基本だと思うが，残念ながら個人としても国家としても明確なものは無いような感じがする。そこで私なりに教育内容について幾つかの提言をしたい。

小学校入学以前の教育については，礼儀作法と自由に遊ばせる事，友達と仲良くする事を学ばせたい。現在の家庭教育ではあまりにも王子様，王女様としての育て方であるような気がする。これは両親だけの責任ではなく，祖父母もこれに加担していると思う。

小学校では基礎・基本学習「読み，書き，算盤」を徹底して反復させる事が欠けていると思う。あとは総合学習で豊かな子供たちの発想を尊重する事，自然体験，社会体験，特殊教育諸学校との交流をぜひ体験させて貰いたい。それらは年1回形式的に行うのではなく，継続的に教育の原点として行ってほしいのである。しかし時代の波はそれだけでは満足しなくなっている。上級学年では論理的思考を養う総合学習，パソコン指導，英会話指導，思春期指導も必要となろう。人間には適時性と言うものがある。小学校で分からなかったものは大人になってもなかなか分からない。戦争中に小・中学時代を送った私の世代は，大人になってから英会話・パソコンなどを勉強してもものにならない場合が多い。公民館長をしている時，中学生を5日間，大人を14日間同一到達度を目標にパソコン教室を開いた事がある。中学生は全員目標を達成したが，大人は3割がリタイヤした。普通教科の到達度は現在より遅くてよい。じっくり漢方処方で力を付ける事。今申し上げた小学生でない身に付かないような，あるいは上達の早い勉強をさせるべきであろう。

中学校の3年間はあまりにも短い。小学校6年生は中等教育に移すべきと思うが，私の現在の立場上これ以上は制度には触れない。中学生の起こす諸問題は1年生が多い理由を考えていただきたい。教科別学習の開始に伴う教師と生徒との人間関係構築に問題があり，生徒は複数の教師を複眼で比較して見るようになるのに，教師が対応出来ていないからである。つまり教師による指導内容

に差があり過ぎると、また教科担当が単に自分に課せられた授業を他の教師と連携なしで進めると、その間隙を突いて生徒は問題を起こす。教師集団のまとまり、校長のリーダーシップがより求められる。中学校1年生は当初のかなりの期間を思春期に伴う生活指導－人生観・職業観の養成－、教科別指導への慣らし運転、小学校での学習内容の復習を行っていただきたい。現在はあまりにも画一的に高校受験をにらんで急いでいる。その期間が過ぎたら生徒の個人差も見えてくるから、少なくとも2年生からは個性・特性に応じた複数の教育課程を設けるべきであろう。それは出来るだけ多くの生徒が楽しく登校し、喜んで下校するよう考えて、授業が楽しくかつ意欲の湧くものでなければならない。数学にしてもパソコンで勉強する者が居てもよいし、英語にしても会話だけ勉強する者があってよい。分かるうが分かるまいが同一教科書を与えないと不平等と言う考え方は、日本の民主主義が未成熟な事を示していると思う。個に応じた教育が大事な時である。「総合的な学習の時間」をどう利用するか教師集団の鼎の軽重が問われるだろう。それこそ地域の実態に応じた学校の個性を発揮出来る絶好の機会である。それだけの権限は学校に与えられるのが、今回の教育改革の方向である。

高校は現在の学科再編成を更に進めればよい。総合学科を持つ高校も設置されたし、来年度から単位制高校も発足する。職業学科については時代の進展に応じた新設学科が毎年登場している。さらに高校入試についても様々な工夫がなされ、中学校での受験勉強は大幅に緩和されていると思う。傾斜配点、面接のみの入試、推薦入学と更に工夫を進めればよい。生徒たちの個性・特性に応じて多様な学科の準備を更に進める事を期待したい。ただ私が以前から気になっているのは、何となく普通科優先の考え方である。普通科はせいぜい文系と理系のコースを設定出来るに過ぎない。ところが5教科を満遍なく理解出来る者は少ない。せいぜい1割であろうが、ここに多くの悲劇の原因がある。普通科は大学進学には確かに有利な点があるのだろうが、数学零点の者が普通科に入学するのは悲劇以外のなにものでもない。地域によっては確かに普通科しかない所もあるが、そのような所ほど中・高連携によってなるべく多くの教科を教えられるように準備すべきであろう。

6年制度の中学校の新設もまた急がれるものである。ともすればエリート学校になるのではないかと思われる節があるが、離島の1中学校1高校の所ではじめればよい。先述したように教師の数は倍になり、多くの多様な教科指導の出来る教師を準備出来るし、何よりも6年間の共同の学校生活は級友の絆を強くする。これは旧制の中学校出身者はよく御存知である。

高校3年間も中学校同様に短い。学校に慣れる事、受験勉強に挟まれて人間関係学習は疎かになる。すべての教科は不十分な勉強しか出来ない者も得意な一つや二つに勉強を絞ると、どの生徒も力を付ける事が出来る。万能の人間だけではないからであるが、そのような出来る事を中心として、社会で仕事の出来る人間を作るのが高校である。青春時代の夢は大事に育てることと現実を教えることが進路指導には大切である。高校卒業時の生徒たちは、親や教師の助言を十分に聞いて、その上で自分の進路を決められると思う。ただ本人の夢だけではこの就職難の時代に自分の気に入った仕事が無い、就職しても夢見ていた現実と違うとの理由で離職する者が3割居ると言うが、進路指

導に親や教師もどこか無責任なところがあるのではと思う。その上に更に現実的な社会体験，ボランティア体験が必要である。高校生になって稲作・甘藷・ソバの花を知らないでは，現実の社会に生きていけないと思う。自然体験，勤労体験も必要なことは言うまでもない。

高等教育は専門学科だけでよいと思う。日本の大学生は勉強しなくなったといろいろな所で嘆きを聞く。私の関係している海外からの留学生たちが指摘しているし，アメリカに留学する大学生が英語もろくに覚えず遊んでいると，アメリカに住んでいる私の友人が嘆いていた。高等教育に欠けているのは厳しさである。大学生は子供でもなければ思春期でもない，立派な大人である。大学生の学力低下が深刻であると言うが，必要な科目は受験科目にすべきであろう。卒業は厳しくして貰いたい。

成人教育について一つだけ提言させて貰いたい。生涯学習社会の到来とともに多様な大人のための学習施設・体制は整っている。ただこれは希望者が原則である。しかし，成人式前後には国民としての義務と家庭を作る準備については，短時間でよいから学習を義務化出来ないものだろうか。

3 郷土教育の充実

先ず小学校から身近な郷土の物語を教えてほしい。指導者は地域に幾らでも居ると思う。それに日本や世界の歴史を添えるような歴史教育がほしい。言葉・文化財・遺跡はどここの市町村にもある。先祖がどのように知恵を働かして命と生活を伝えて来たか教えてほしい。「心と生きる力」の教育でもある。中学校以上では，体系的な郷土の歴史を学んでほしい。鹿児島は最古の遺跡を持ち，かつ神話の古里でもある。神話の里は宮崎県に取られてしまったが，事実と区別して知ってもらうのは問題ないと思う。そんな時間があるかとの疑問の向きもあろうが，「総合的な学習の時間」の一部と「L. H. R」の一部を利用すれば出来る。自分たちの文化，つまり郷土の歴史・文化財・言語を知らない，その上外国語が出来ないでは海外の人たちの尊敬を得られない事は御承知だろうが，残念ながら現実はその通りである。ヨーロッパを旅行すると，いろいろな国の若者たちが一人旅をしている。彼らは幾つかの言葉を操り，ターミナル駅に着いた者と出発する者とで情報の交換をし，やすい旅行を楽しむが，残念ながら日本の若者は少ない。そのくせ，ブランド商店街にはゾロゾロと歩いている。国際性も身に付ける教育が叫ばれるゆえんであるが，その前に自分たちのアイデンティティーが欲しい。郷土教育はその意味で人生の漢方薬である。県外出身で鹿児島の教師になっている人には酷な言い方だが，生徒を大阪弁で叱っても効果は少ない。「コリャイッダマシユイレンカ」と叱った方が効果がある。幸いに鹿児島県では小・中学生向けの郷土史に関する本は結構配布されている。学校ではどの程度利用されているだろうか。教育課程編成について学校に大幅な権限を委譲するのが，今回の教育改革の目玉の一つである。そして鹿児島の長所と短所を学んでもらいたいのである。太平洋戦争で加害者となった日本の歴史教育には確かに問題点が多かったが，鹿児島はそんな事と関係なく若者に効く漢方薬のような郷土の歴史がある。

4 教師の意識改革

教育改革と言っても行政はその原則的な方向を示すだけであり、実際の作業は教育の現場に任される。基礎・基本学習、自然や社会体験、生きる力や心の厳しさ・優しさの養成、自主的・自発的学習習慣、個性・特性の伸長、何れも教える側が将来の高齢化社会、高度技術社会、国際化社会を見据えて計画的に熱意をもって子供たちの能力を引き出す責任がある。繰り返すが、単に教育課程に従いそれを消化するだけでは児童・生徒との心の触れ合いが不十分であることは言うまでもない。現代社会の病根は人間関係の希薄さにある。先ず教師が人間関係学習に取り組んでもらいたい。教師集団が意見が一致せず、児童・生徒と意志伝達がうまくいかない場合には問題が噴出する事は言うまでもない。また単に校務分掌上の仕事だけをすればよいと言うものでもない。お互いに仕事をカバーしあって完全なものになる。また教師の主体性は何かと言うことについて意識改革を図る必要がある。児童・生徒の自主性尊重はよいが、教育の場に教師の主体性が無ければ流されてしまう。公務員としての教師は組織の一員であり、主体性との関係は難しい面もあるが、教室での責任は重い。しかし、その責任感について私には不満がある。社会全体の風潮とは言え、教師であっても予習不足で授業に臨むと、子供たちを把握出来ない経験は誰しも持っているだろう。

学級崩壊も、学力不足も、「社会の掟を守る躰」にしても誰の責任でもない。親と教師の責任であり、高い能力を持つ教師集団の力をまとめる事の出来ない管理職にも責任がある。教師こそ責任感を強く持つと言う意識が大切である。そうでないと教師の一挙手がすぐに児童・生徒に反映する。

おわりに

学校・社会・家庭の三者連携の大切さが強調されるようになって久しいが、まだ実現していない。学校で問題が発生し、マスコミに報道されて、地域の人々は初めて知って驚く場合が多い。学校行事の時だけでなく、何時でも学校は地域に開かれたものであってほしい。また地域の援助を受けるにしても情報を得るにしても、学校が地域の協力を待っているようでは三者連携は出来ない。もっと学校から地域に出掛けて、その協力を得る努力をしてもらいたいと思う。目前の改革に対応するだけでなく、21世紀をにらんだ漢方処方をお願いしたい。